碁と沖縄とウイスコンシン

大和田囲碁同好会　副会長　成田　滋

私は樺太生まれです。1945 年の終戦直前北海道の美幌に引き揚げました。国鉄にいた父の異動で道内を転々としました。旭川西高校から北海道大学へ、そして 1965 年に卒業し、しばらくして沖縄で幼児教育を始めるために 1971 年にパスポートと予防注射を受けて琉球政府統治の沖縄に行きました。本土復帰の前年のことです。琉球政府文教局の人が沖縄の幼児教育の振興のためにと設置基準をゆるめてくれて幼稚園設置を認可してくれました。

沖縄は昔から囲碁が盛んです。江戸の中期、琉球が江戸幕府へ朝貢のとき同行していた親雲上浜比嘉（ペーチンハマヒガ）が四世本因坊道策と三田にあった島津藩邸にて四子局で打ったという記録があるくらいです。

1970 年代、沖縄の囲碁界は、下地玄忠五段とのいう地元紙沖縄タイムスの囲碁欄を 40 年余りも執筆していたという伝説的な棋士がおられました。現在日本棋院に所属する下地玄昭七段はそのご子息です。沖縄からは時本壱九段、その弟子に新垣武九段、新垣朱武九段、知念かおり四段がいます。残念ながら私は仕事にかまけて、囲碁を楽しむ余裕がありませんでした。これが私と囲碁のつながりでの第一の悔やまれるできごとです。

時代を経て 1977 年に那覇東ロータリークラブから推薦を受け国際ロータリークラブから奨学資金を頂戴しました。家族を連れてアメリカは中西部にあるウイスコンシン大学へ行くことになりました。ウイスコンシン州は酪農が盛んなところです。大学

ウイスコンシン大学　バスコムホール

構内に湖を背景とした堂々たる大学会館があります。劇場、宿泊施設、会議場、宴会場、三つのレストラン、アイスクリーム・スタンド、談話室などが完備されています。

ある時、大学会館の一角で中国人か韓国人と見受けられる留学生グループが対局しているのを見かけました。私は研究とアルバイトで家族を支える不如意な暮らしをする留学生でしたので、この人々に加わることはできませんでした。対局したいという気持ちが疼いたのはもちろんです。これが第二の悔やまれることです。

幸い 1983 年に学位を貰い、それから横須賀にある文科省関連の研究所で 10 年、その後兵庫にある小さな教育大学で 10 年働くことができました。ですがこの二つの職場で囲碁をする機会はほとんどありませんでした。これが第三の悔やまれることです。「塞翁が馬」のように運不運は予測するのが難しいものです。

思えば棋力を伸ばす大事な時期を逃したのが、30 代から 40 代にかけての沖縄とウイスコンシンでの生活です。今毎日一時間は」碁の本と碁盤の上を徘徊しているのですが、かって語学やさまざまな知識をパタンとしてスイスイと頭に入ってきた興奮は体験できません。棋力も学力も小さいときからの絶え間ない刺激がないと伸びないのです。「発達や進歩には時がある」ということでしょう。